世界の大学めぐり

## CAL Aggie　カリフォルニア大学デービス校

斉藤　孝

“Hi Takashi !” 、”How are you doing ?” 昨日会ったばかりの若き女性職員からそう呼ばれると自分の歳も忘れ、気持ちが若くなる。オープンで自由平等のお国柄であるから、地位、年齢、仕事、性別、人種など気にしない。

このように、なにもかもが明るく、大きなカリフォルニアの澄み切った青空の下、広大な自然に囲まれた米国カリフォルニア大学デービス校 UCD(University of California Davis)で、私は世界中から集まった人々と 2002 年度の在外研究生活を送ることができた。

ところで、カリフォルニア大学の名前はあまりにも有名であり、いまさら説明するまでもないのだが、意外に知られていないことがある。それが複数の巨大な大学群から構成された総合名称であるということである。カリフォルニア大学は、全部で 10 校から構成される公立大学である。その所在地は、州南部から順番にいくとメキシコ国境に隣接する San Diego にはじまり、Irvin、Los Angeles、 Santa Barbara、 Merced、Santa Cruz、Riverside、San Francisco、Berkeley、そして中部にある Davis(UCD)となる。これらのカリフォルニア大学(UC システム)とは別にカリフォルニア州立大学(CS システム)というのがあり、サクラメントやサンノゼ、フレスノなど州内の大きな都市に３４校ある。この州立と公立の違いは、日本的に解釈すると、公立が国立（旧制１期校）で、州立が県立（旧制２期校）ということになるだろう。

UCD のあるデービス市とその周辺は、シェイラネバタ山脈に源をもつサクラメント河とアメリカン河から豊富な水の供給をうけて、肥沃な土地と強烈な太陽の恵みに満ちていることから、あらゆる農作物と酪農に適している。その豊潤な地において UCD は、1908 年に農業専門学校として誕生した。大学のニックネームは、”Aggie ”であり、農業の Agriculture に由来するものである。在学生と卒業生は誇りをもって、その前にカリフォルニアの略称を付けて ”CAL Aggie ”と呼ぶ。

UCD の畜産学と獣医学は、全米一の水準といわれる。したがって、多くの学生研究者が世界中から来ている。もちろん生命科学やコンピュータ科学という先端領域でも全米 15 位以内にランクされている。

とかく農業や畜産は、日本ではダサイというイメージがあるが、米国は世界一の農業国であることから、いまだに若者には人気があり多くの優秀な人材が集まる。農業は先端のビジネスでもあるわけだ。テレビでは、一日中カントリーウェスタン専門の局から、”ド演歌 ”なみの泥臭い大西部のカントリーソングの数々を流している。鼻にかかった甘い西部訛りの歌を聴きながら飲むバーボン・ウイスキーの味は格別なものである。

UCD の学生数は約２万人であるから、人口

５万人のデービス市では市民のほとんどが学生、職員、そして研究関係者といえるだろう。

UCD キャンパスは広大で、様々な農作物の演習・実験の農場、それから飛行場までが多摩市ほどの地域に点在している。そこを英国ロンドンからもってきた赤い二階建てバスを学生が運転している。木立に覆われた緑のキャンパスには、平屋か低層建築が多く、コンクリート丸出しの大きな校舎は見当たらない。牧場のサイロに似せたカントリー風の木造校舎が多いのが特徴だ。ノンビリと学生は自転車で通学し、キャンパス内を周っている姿が実によく似合う。自転車はデービスの町と大学の主な交通手段である。

私の在外研究課題は、デジタル記録情報学であった。これは机上研究だけでなく、 ある意味では知識工学に似たような知識モデルを構築し、それによって実証するという研究姿勢が重要になるが、UCD では、幸いにして実験の機会を得ることができた。 それは書物の記録情報を扱うことによって獲得される「書誌暗黙知」の実験であった。そのために、RCT(Remote Collaboration Tool)と呼ぶ実験システムを使用した。

RCT は、コンピュータ科学部の Walters 教授が開発した遠隔地からコラボレーションを行うシステムである。それは時空を超えた知的共同作業を目的としたもので、主に遠隔地教育に向いている。ただし、教員から学生へという一方通行による教育ではなく、学生同士、教員と学生、その他研究者が　ある教育テーマを基にして双方向に情報交換し、相互に知識を育み、素朴な暗黙知から専門知識までの獲得にいたる協調と、その知識ベースをインターネット上に構築することができるものである。

UCD をはじめとする多くの米国の大学における研究アプローチの斬新さ、多彩な人々には驚かされた。そんな米国の大学において、若き研究者の姿を眺めていると、羨ましくなった。もはや歳は戻らないが、私の研究課題を探索する旅は、かなり遠回りしてきたわけであるが、それでもやっと「原点回帰」という地図によって目的地を見つけることができた。

その原点とは、「Ontology」(認識論)である。それは知識インタフェースのために情報と知識の地図を生成することに活用される。その領域は、数学、認知科学、意味論、分類学、哲学、心理学、論理学、言語学、図書館学などに関わることである。つまり、それは工学的、科学的アプローチから哲学的、人間的アプローチへと大転換することを意味する。最先端の情報科学やコンピュータ工学の応用、人工知能、そして最近のユビキタスネットワークなどの研究動向を展望してみると、そこには限りなく人間研究に向かっていることが明らかだ。いまアメリカでは、この「Ontology」が技術と工学の世界でも重要とされている。

私の在外研究の成果も、この「Ontology」のアプローチによるもので、記録情報に関する知識地図（K-Map）を形成するものであった。（文学部教授　記録情報学）